

## みかぶ帯の緑色岩類を訪ねて：夏季巡検報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-07-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松本, 仁美 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00025593">https://doi.org/10.14945/00025593</a>

# みかぶ帯の緑色岩類を訪ねて

## —夏季巡検報告—

松本仁美\*

本年度の夏季巡検会は、静岡大学理学部の荒井章司会員の案内で、「みかぶ帯の緑色岩類」をテーマにして8月24日(日)マイカー方式で実施された。東名三ヶ日インターバス停に午前10時に集合したが、天候に恵まれ、参加者は30名を超え、車10台という盛況ぶりであった。

県西部に分布するみかぶ帯の緑色岩類は、最近脚光を浴びているオフィオライト問題もからみ、現在の地球科学上の問題点を知る上で、貴重な巡検会であった。オフィオライトとは、過去の海洋地殻が地表に表われているもので、最下部から、変形を受けたかんらん岩・かんらん岩・粗粒の塩基性岩(はんれい岩、角閃岩など)・粗粒の玄武岩・細粒の玄武岩、そして最上部にチャートがのるという規則的な層序を作っている岩体を総称して呼ぶものである。県西部に見られるみかぶ帯には、このような層序を作っている緑色岩類があり、これが過去の海洋底地殻又はマントルの一部ではないかと考えられるとの話であった。今回の巡検は、大福寺から瓶割峠、富幕山、陣座峠へと至る林道沿いの露頭を見学していくコースであった。

まず、大福寺から瓶割峠へ至る林道沿いには、見かけは同じであるが、造岩鉱物の粒度が、細粒から粗粒へと移り変わっていく緑色岩類が見られた。細粒の玄武岩から粗粒の玄武岩、はんれい岩、角閃岩へと移り変わるオフィオライトの層序を上部から下部へ見ていったことになる。

峠では現在、角閃岩を採石しているが、以前は、かんらん岩を採っていた様である。そのなごりともいえるかんらん岩が、道路わきの至る所どころがっていた。角閃岩とかんらん岩との境界が、モホピッチ不連続面と考えられている所で、この峠のどこかに、かつてのモホ面があったわけである。ここで昼食をとる。

午後は、瓶割峠から富幕山に至る林道沿いに、この付近で見られるみかぶ帯の最下部を見学していった。マグマ溜りの中の結晶分化作用によってできた、鉱物結晶の沈積構造は興味深かった。かんらん石の多い部分と輝石・斜長石の部分が層状をなし、かんらん石は風化を受けやすいため、差別侵食により凹凸のある面を作っていた。

最後の見学地は、陣座峠の採石場であった。当日採石場が営



写真1 大福寺～瓶割峠へ至る

林道沿いの玄武岩の露頭。細粒部分と粗粒部分が交互に分布しつつ、全体としては右側へいく程粗粒となる。

\* 静岡市立安倍口小学校

業していたので、中に入って詳しく見学することができなく残念であった。この緑色岩は、午前中に見てきた緑色岩と違い、一見、結晶片岩風の見かけをしていた。これは、三波川の変成作用を受けたためであるとのことであった。みかぶ帯の岩石は、その生成当時の変成と三波川の変成と二回の変成作用を受けているそうである。この緑色岩は、オフィオライト岩体の周りに分布するかんらん岩やはんれい岩の巨礫を含む堆積岩で、午前中に見てきたオフィオライト岩体と同質同源のものであるらしい。すなわち、ここでのみかぶ帯は、大きなオフィオライト岩体から小さなかんらん岩、はんれい岩の礫を含む、礫層のような構造をしているものであるとの説明であった。この場所を最後に、今回の巡検は無事終わり、現地解散となった。



写真2 瓶割峠採石場

右斜め上から左斜め下にかけて岩相の変化面が走っている。



写真3 かんらん石と輝石の層状構造